

京都大学言語学懇話会  
2020 年度 発表要旨

## 例会報告

### 第 112 回例会

日時・場所 2020 年 7 月 4 日 (土) 13:30-16:45 於 Zoom  
発表題目 「語基」からふたたび「語」へ—結節の視点による  
宮岡 伯人

### 第 113 回例会

日時・場所 2020 年 12 月 12 日 (土) 13:30 ~ 16:45 於 Zoom  
発表題目 遼代漢語の声調と契丹語の音韻  
大竹 昌巳 (京都大学)  
ソグド文女奴隸売買契約文書の理解と冠詞の問題  
—ソグド語研究を振り返って—  
吉田 豊 (帝京大学文化財研究所客員教授)

※ 2020 年度の 4 月の懇話会は Covid-19 蔓延の影響で中止

## 「語基」からふたたび「語」へ — 結節の視点による

宮岡 伯人

本居宣長を継いで春庭が完成した『詞八衢』の、母音交替に着目した「活」—今日の「活用形」につらなる—は、宣長以後の停滞（J. ホイットマン）のなか、国語学史上（共時面）最大の進展とされる。

これの中核である「語基」の名称は芳賀矢一『国民性十論』（1908）が初出のようだが、定義は明瞭とはいえず、以来、『国語学大辞典』の一項目は、語幹さらには語根と類義的につかわれるとしつつ、子音語幹 vs. 母音語幹にかかわり、a) 語幹母音の変異による強活用（咲カ/咲ク/咲ケ/咲コ）と b) 接辞の添加（起キ/起キル/起キレ/起キロ）による弱活用に動詞の活用を大別する（山口佳紀「活用」）。しかしこれだと活用という（同一の文法機能をもつ）形態変化が一方は母音交替、他方は接辞という異なる手法によって処理されていることになる。『日本語文法事典』も同様、（古典語について）母音変化型、語尾添加型（と古典語独自の混合変化型）に分けている（坪井美樹「活用」<sup>3</sup>）。両者とも、接辞・語尾は、ル、レ、ロを意味しているが、これらは接辞でも語尾でもない（末尾の例に見るように、上記“強活用”の交替母音に挿入子音 {r} がついたものにすぎない）。だからこそ、活用形にしたがった語基母音の並行性にきづくべきであろう。

この他にも、活用の起源に本格的な論議を展開しだしつつ、語基母音の認識はみえず、逆に、たまたま a) などではじまる接辞がついたにすぎないといった類の、のちの派生文法につらなったり、語基の詳細なあつかいをしつつ、挿入子音の概念はみられないものもある。

もっとも直截的に春庭の「活」を継承しているのは、亀井孝/河野六郎の「語基」であろう。亀井『概説文語文法』（1955）は「用言の活用形が<語基>であり、これにさまざまな接尾辞がつく」と記し、ほぼおなじ明記が『言語学大辞典術語編』（1996）にもみられる。詳しくは河野「日本語（特質）—活用」（『世界言語編2』1989）参照。

春庭『八衢』にもどると、イル（射）、キル（着）などのルにつき黒付点の「るもじをそえる」としるし（一方、たんなる文字強調は白付点）、ルが語の内部要素ではなく機械的付加音であることを含意している。20年後刊行の『詞通路』には「る、れ、よもじをそえる」とあって、これらが語基にあたると思われ、-ウ・-ル・-ヨ（食べ

よ) は接辞でも語尾でもないという理解がある。「-セル・-サセル」のサ、ルも語基(セだけが接尾辞)である。

以上を念頭に、日本語動詞の構成(結節—宮岡 2015)にかかわる要素をみていくに、動詞は語幹(語基)[-派生接尾辞(語基)<sup>0-n</sup>]-屈折接尾辞からなる。掉尾をかざる屈折接尾辞には当然、語基はない。派生接尾辞末も母音・子音が区別され、派生には複合動詞後項の二次的接尾辞化をもふくむ。

とくに注目すべきは、機械的な音現象(過程)としての母音連続を回避する子音挿入 {r, s, y} と(接尾辞のなかで区別する必要のある)屈折接尾辞とりわけ三種のゼロであろう。Ø 屈折は連用・終止・命令形のみ以後続する(形容(動)詞にも語基を認めることはできるが不規則)。下記で、付加音は下線。

a) kaka-se{r}u-Ø / kaki-Ø, kaki-masi-ta / kaku-Ø, kaku-na / kake-ba / kako-u

b) tabe{r}a-re{r}u-Ø, tabe{s}a-se-masu-Ø / tabe{r}u-Ø, tabe{r}u-na / tabe{r}o-Ø, tabe{y}o-u // 一定の接尾辞は語基なく語幹に直接つく

tabe-tai-Ø, tabe{r}e-ba, tabe-tagari-dasi-souda(t)-ta

語内部の要素である接尾辞と明確に区別すべきが前接語である(=以下で示す)。語の一種として、先行の語に凭れかかって(前接し)、ひとつの塊(結節)をなす。いわゆる助詞のおおくがこれにあたる(=wa, =ne, =kara, =rasii-)。屈折接尾辞のあとにも前接しうるし、それじたいも語基・接尾辞をととなりうる。

c) kai-ta=ne (確認), tabe{r}u-Ø=rasika(t)-ta

接尾辞と接語の差は、ひねり要素と(形式動詞 suru-, aru-による)再立ち上げによって判別できる。

d) kaku-na (禁止屈折), kaki=wa=su{r}u-na

kaku-Ø=ne (確認), kaku-Ø=kara=ne

母音交替は体言の複合形成にかんし、被覆形 vs. 露出形の対にも言われることがある。

e) saka- vs. sake: saka+ya, saka+gura vs. sake, sake+zukuri

(みやおか おさひと)

## 遼代漢語の声調と契丹語の音韻

大竹 昌巳

文字は言語情報のすべてを反映するわけではなく、とりわけ韻律的差異は失われやすい。文献言語の研究においては、このような文字情報から直接アクセスできない言語情報をいかにして復元するかが研究者の腕の見せどころでもある。本発表では、漢語の契丹小字表記と契丹語の漢字音写という2種類の対音資料を用いて、漢語・契丹語各々の文献資料からは直接知ることのできない遼代漢語の声調と契丹語の音調とを復元することを試みた。

漢語の契丹小字表記においては、一般に声調は書き分けられないが、随意的な特殊表記として字素を余分に書き加える方式（以下、余剰表記）が存在し、これが漢語の去声音節を表わすための特殊表記であることが指摘されている。発表者は、余剰表記が去声音節（全濁上声・次濁入声音節を含む）のみならず陽平声音節（全濁入声音節を含む）にも使用されることを指摘した上で、両者には余剰表記の使用比率に差があり、それによって別群を成すと推定されることを述べた。また、余剰表記は当該音節の持続時間の長さを示すもので、その長さは遼代漢語の去声（および陽平声）が曲折調であることに起因するという仮説を提示した。さらに、契丹小字の漢語表記には別の特殊表記（中断表記）も存在し、これが漢語の陽調（低レジスター）音節を表わすための表記であることを、表記がもたらす視覚的効果や同系言語である現代モンゴル語の音調を根拠に推定した。

続いて、遼代漢字石刻文献中の契丹語音写を分析し、まず去声字が契丹語の重音節の表記に使用される頻度が明らかに高く、上述の結論を裏づけることを述べた。また、声調ごとの位置による使用頻度に明確な差があり、陽調字が語頭で、陰調字が語末で使用される傾向があることから契丹語の語音調が低く始まり高く終わるものであったこと、入声字の分布から遼代漢語では入声が入声で短促調を保持し、語末では舒声に合流していたことなどを明らかにした。

（おおたけ まさみ）

## ソグド文女奴隸売買契約文書の理解と冠詞の問題

### —ソグド語研究を振り返って—

吉田 豊

本発表では、2020年3月に定年退職した発表者が、退職まで40年あまりのソグド語研究を回顧するとともに、特に思い出に残る文献としてトルファンで発見された女奴隸売買契約文書をとりあげ、当初の解釈の誤りや問題点、その後の研究で改善できた点などについて解説した。考えられないような勘違いなどもあったことをやや自嘲的に語った。この文書は639年のものでほぼ古典的なソグド語で書かれているが、そこに見られる冠詞を二つ重ねるという奇妙な現象に着目して、その背景を論じた。

冠詞は文法的には指示詞の範疇に属する。ソグド語の指示詞の *deixis* は、「こ、そ、あ」の3系列だが、話者からの距離ではなく人称に結びつくことが知られている。またその3系列の指示詞には「強い」指示詞と「弱い」指示詞の区別がある。歴史的に見れば、弱い指示詞は古代語イラン語の指示詞に遡り、強い指示詞は、弱い指示詞を基にしてそれを拡張した形式になっている、例：*xu*「あれ（弱）」、*xune*「あれ（強）」（主格）。例えば漢文仏典から翻訳された文献では、弱い指示詞に対応する表現はないが、強い指示詞は漢文の指示詞に対応する。古典的なソグド語では、この弱い指示詞が一部で冠詞化していることが知られる。3系列の *deixis* の中では、「あ（つまり3人称）」の系列の弱い指示詞の頻度が極端に高く、西ヨーロッパの近代語の定冠詞とよく似た機能を持っているように見える。これはこの系列の指示詞が、当初から場面指示以外に文脈指示の機能を持っていたことが背景にあったであろう。しかるに、古典的ソグド語の段階では「こ（つまり1人称）」の系列の弱い指示詞が冠詞化の兆候を示すようになる。それと同時に「あ」の系列の弱い指示詞は、「定」の文脈を超えて使用範囲を拡大する傾向を見せる。Greenbergの冠詞に関する研究で提案された、stage II、つまり定冠詞が、単に *specific* な名詞句に添えられる要素になり始めている。契約文書に見られる冠詞の二重使用は過渡期を反映する可能性がある。

（よしだ ゆたか）